



## 設定

いじめっ子、いじめられっ子、その友人の3人をメインとした男子校でのいじめ、羞恥系メインのお話です。いじめられっ子、尚の視点をメインに描いています。

## 登場人物

佐藤 晃一(さとう こういち)17 歳 野球部・三年

曲がったことが嫌いで、ルールや筋を重んじる。いじめや不正を見過ごせないが、感情表現は不器用。尚の中学から一緒の同級生。

黒田 了(くろだ りょう) 17 歳 野球部・三年

支配欲が強く、弱い立場の人間を見下す。表向きは愛想がよく、教師の前では態度を変える。晃一の正義感を「偽善」「うざい」と嫌っている。帰宅部の生徒を日常的にいじり、からかい、支配している。

佐々木 俊樹(ささき としき) 17 歳 サッカー部・三年

黒田の友人。いじめに加担している。

三浦 尚(みうら なお) 17 歳 帰宅部

体が細く、運動は苦手。自分の意見をはっきり言えない。

## 標的

校舎の裏手、滅多に人が来ないフェンス沿いの影に、一匹の犬がいる。黒田が可愛がっている犬だ。首輪は古く、誰かに引かれるのを待つように地面に座っている。

「ワンワンワン！はっはっはっ」

黒田を見つけると、起き上がり、舌を出しながら息をして、しっぽを振って喜んでいる。口からはよだれがたれている。

黒田も嬉しそうに笑っている。あの黒田がこんなにかわいがるなんてよほど相性がいいのだろう、、、。犬は尚に気づくと一瞬視線を伏せたが、すぐに近寄ってきた黒田に頬ずりをしている。黒田はいつもご褒美をくれるから慕っているのだろう。黒田の笑顔は尚の心を安心させる、、、。

最初は、ただの悪ふざけだった。

からかい、無視、嘲笑。尚が標的になり、黒田だけでなく佐々木もそれを面白がり、周囲は見て見ぬふりをする。

廊下ですれ違うときの、わざとらしい肩のぶつかり方。教室で交わされる、聞こえるか聞こえないかの声量の悪意。

「やめろよ」と言う機会は、何度もあった。

それでも言葉は喉の奥で引っかかり、結局、出てこなかった。思うことと、実

際に行動することの間に、こんなにも距離があるとは知らなかった。気づけば、それは日常になっていた。

笑う側と、黙る側と、見ているだけの側。尚は、真ん中の場所に立ち続けていた、、、。

「ほら、尚君のストリップショーがはじまるよー。」

尚は股間の部分に『童貞』と書かれた白のブリーフを履き、机の上に立っている。

（そんなに笑って、、、何が楽しいんだ、、、僕はちっとも楽しくない、、、。）

「ほら、ノリよくやれよ、尚君好きじゃん、見られるの。」

ニヤニヤしながら尚を見ている黒田に、尚は怒る気力もない。ただ、命令に従えばいい、それだけだった。

尚は歌いながら、尻をふりながらブリーフを脱いでいった。自身の大事な部分をさらけ出すと、蟹股でダブルピースのポーズをとる。蟹股になることで、玉やアナルなどもよりよく見える。

男子校で男ばかりと言ってもやはり恥ずかしい。クラスの視線が一点に集中している。そんなに大層なものではないそこに、毛がなくなっているそこに、、、。

（こんなのいじめだろ、、、なんで誰も止めない、、、俺が笑っているから

か、、、みんな分かっているのに、、、。)

言いなりになって、滑稽な姿になっている尚を見て皆楽しんでいる。尚が好きで従っていると思っているのだろうか、、、。

「何してんだよ！」

クラスにいきなり怒号がとどろく。晃一だ。こうなることが分かっているから、黒田はいつも晃一がいない時を狙って尚をいたぶるのだ。晃一は唯一尚に手を差し伸べてくれるクラスメートだ。黒田のことなど一切怖いと思っていないのだろう。いじめを見かけると必ず止めてくれる。

二人はお互いの胸倉をつかみすごみあっていたが、「先生が来るぞ！」というクラスメートの叫び声でお互いの胸倉を話し、尚は急いで服を着た。黒田が後ろの席で「あいつまじで邪魔だな、、、。」そう制御できない怒りを必死に制御しているような、そんな声でつぶやいたのが耳に残っていた、、、。

## 笑顔

「晃一、今日部活は大丈夫だったの？」

「おう、今日はオフだから気にすんな。お前が見つけたっていう子犬見てみたいいな。」

「うん、せっかくだから晃一にも見せたくてさ。すごい、かわいいんだ、、、。  
そ、そうだ一緒に行ってくれるお礼、これ飲んで。」

「お礼？お礼されるようなことかな？」

晃一と尚は何げない会話をしながら尚が見つけたという子犬を見に、背の高い草が生い茂る河川敷を歩いている。晃一は尚から受け取ったお茶を飲みながら、尚のあとをついていく。

「ああ、ここだ、、、。」

「ここ？子犬なんているか？」

「ああ、かわいい子犬がいるぜ。」

草むらから出てきたのは黒田と佐々木だった。

「尚、いったい、、どういことだよ、、、。」

「、、、、、、。」

「ほら。」

黒田に放り投げられた首輪を自らつけると、尚は服を脱ぎ、四つん這いにな